

雑誌記事にみる五高工学部・熊本高工の 輩出した土木技術者の群像

山中 孝文¹・小林 一郎²・田中 尚人³・星野 裕司⁴

¹正会員 熊本大学イノベーション推進機構 イノベーション推進人材育成センター 特別研究員
(〒860-8555 熊本県熊本市中央区黒髪2丁目39-1)

E-mail: tratworks@gmail.com

²正会員 熊本大学大学院教授 自然科学研究科 (同上)

E-mail: ponts@kumamoto-u.ac.jp

³正会員 熊本大学政策創造研究教育センター准教授 (同上)

E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp

⁴正会員 熊本大学大学院准教授 自然科学研究科 (同上)

E-mail: hoshino@kumamoto-u.ac.jp

旧制第五高等学校工学部のちの熊本高等工業学校では、戦前に高等な土木技術者教育をおこなっていた。これらで教育を受けて輩出された土木技術者は「工学得業士」という称号を授与され、その人数は1925（大正14）年時点で、帝国大学と高等工業学校の全卒業生のうち約18%を占めていた。先行研究において、五高工学部・熊本高工から輩出された工学得業士611名の勤務先の変遷を明らかにしたところ、主な勤務先は地方官庁であったこと、多くが勤務先を次々に移っていたことがわかった。本研究は途中報告になるが、611名の工学得業士が携わった仕事の内容について、雑誌記事や著書を対象に調査をおこない、五高工学部・熊本高工から輩出された工学得業士の群像の一端を描くことを試みるものである。

Key Words : civil engineering education, technical school, magazine article database

1. はじめに

旧制第五高等学校工学部（以下、五高工学部と省略）のちの熊本高等工業学校（以下、熊本高工と省略）では、戦前に高等な土木技術者教育をおこなっていた。五高工学部は2校しか設立されなかった高等学校工学部という稀な機関であり、熊本高工はそのような学部が独立してできた高等工業学校であった。その五高工学部の教育目的は、帝国大学工科大学に準じるほどの高等な土木技術者教育を目指すことであり、熊本高工は日本国内の実地で即戦力となる土木技術者を養成するものであった。このような教育を受けて輩出された土木技術者は「工学得業士」という称号を授与され、その人数は1925（大正14）年時点で、帝国大学と高等工業学校の全卒業生のうち約18%を占めていた。

筆者らは先行研究¹⁾において、五高工学部・熊本高工から輩出された工学得業士について、勤務先の変遷を明らかにした。その対象は、1901（明治34）年の五高工学部第1期生から1925（大正14）年の卒業生までの611

名であり、全員について1925（大正14）年までの勤務先の変遷を追うことができた。その結果、主な勤務先は府県や市町村といった地方官庁であったこと、多くが勤務先を次々に移っていたことという特徴がみられた。しかし、課題として、勤務先の名称が判明するのみで、職階や仕事内容についてはほぼ不明という点があげられた。

本研究は、611名の工学得業士が携わった仕事の内容について、雑誌記事や著書を対象に調査をおこない、五高工学部・熊本高工から輩出された工学得業士の群像の一端を描くことを試みるものである。

ただし、携わった仕事内容について、詳細に明らかになる者もいる。例えば、1910（明治43）年卒業の中島健吉²⁾、1915（大正4）年卒業の安部源三郎³⁾、研究対象外ではあるが1917（昭和6）年卒業の小牧才二⁴⁾、1949（昭和24）年卒業の立川義正⁵⁾、以上4名は伝記が出版されている。また、前掲の安部源三郎⁷⁾、1922（大正11）年卒業の池本泰兒⁸⁾、以上2名は人物事典に掲載されている。このような人物は、既に客観的な高い評価がされている者であり、ごく一部であるといえる。

2. 雑誌記事データベースの分析

先行研究¹⁾で勤務先の変遷を追うことのできた 1901 (明治 34) 年から 1925 (大正 14) 年までの卒業生 611 名を対象に、彼らの執筆した雑誌記事の調査をおこなう。雑誌記事を対象とする理由として、記事を執筆するということは、事業などに主体的に関わっているか、そのような立場にあるということが考えられるためである。

(1) 検索対象

「土木学会附属土木図書館デジタルアーカイブス」と「国立国会図書館」で卒業生の氏名を検索した。デジタルアーカイブとして公開されているものは Web 上でその内容を確認した。国立国会図書館の館内限定公開の場合は、図書館で直接内容を確認した。

(2) 雑誌記事データベースの作成

卒業年の順番に、以下の 12 項目を整理した (表-1)。

a) 記事から整理する項目

1. 著者名, 2. 勤務先・職階, 3. 記事タイトル,
4. 雑誌名, 5. 出版社, 6. 巻・号, 7. ページ数,
8. 発行年月

b) 筆者が a) から判断した項目

9. 記事の種類 (研究活動, 技術報告, 事業報告, 補遺), 10. 分野 (23 種類)

c) 「9. 記事の種類」が事業報告の場合に整理する項目

11. 対象地, 12. 事業期間

「10. 分野」は、『京都大学工学部土木工学教室六十年史』に掲載されている「卒業生の研究報告」を参考にした。上記資料では、教員の研究報告や卒業生の研究報告、著書が整理されている。雑誌記事データベースでは、この 21 種類の分類を参考にし、そのほかに、そのどれにも該当しなかった 2 種類を加えて 23 種類とした。まず、21 種類を記す。

1. 土木一般, 2. 応用力学, 3. 土性および土質力学,
4. 水理学, 5. 水文学, 6. 測量, 7. 材料,
8. コンクリート・鉄筋コンクリートおよびピーエスコンクリート, 9. 施工, 10. 溶接, 11. 河川,
12. 発電水力, 13. ダム, 14. 上下水道, 15. 港湾,
16. 道路, 17. 都市計画, 18. 橋梁および構造物,
19. 鉄道, 20. 隧道, 21. 補遺

以下が追加した 2 種類である。

22. 鉱山, 23. 人物像

それぞれが指す内容を簡潔に記すと、「1. 土木一般」は土木工学や土木技術、技術者など、複数分野もしくは全般に範囲が及ぶ場合である。「2. 応用力学」から「5. 水文学」は学問を扱う場合、「6. 測量」から「20. 隧道」、

「22. 鉱山」は構造物や土木事業などを扱う場合、「23. 人物像」は著者が回顧した、もしくは回顧されたものを指す。「21. 補遺」はそのどれにも該当しないものである。

(3) 雑誌記事データベースの概要

卒業生の氏名を検索した結果、90 名 458 件が該当した。そのうち、記事内もしくはその他の資料により卒業生本人だと確認できた件数は、現時点で 18 名 255 件であった。それ以外の記事は、同姓同名の別人が執筆した可能性もあるため、今回は研究対象としなかった。

a) 著者名

記事件数の多い方から、5 名をあげる。

1. 池本泰児 (63 件, 24.7%)
2. 吉田弥七 (34 件, 13.3%)
3. 大野諫 (30 件, 11.8%)
4. 川上謙太郎 (27 件, 10.6%)
5. 藤田宗光 (24 件, 9.4%)

b) 「記事の種類」と「分野」

図-1 に、「記事の種類」と記事の種類ごとの「分野」の件数、割合を示した。その結果、総数 255 件中、「研究活動」が 116 件 (45.5%)、「技術報告」が 15 件 (5.9%)、「事業報告」が 9 件 (3.5%)、「補遺」が 115 件 (45.1%) であった。

各種類の中でもっとも多い分野を示す。研究活動では「応用力学」が 32 件 (12.5%) で、そのうち 24 件が大野諫による記事である。技術報告では「土木一般」が 2 件 (0.8%)、事業報告では「発電水力」が 3 件 (1.2%) である。補遺では「道路」が 29 件 (11.4%) となっており、そのうち 24 件が池本泰児による記事である。

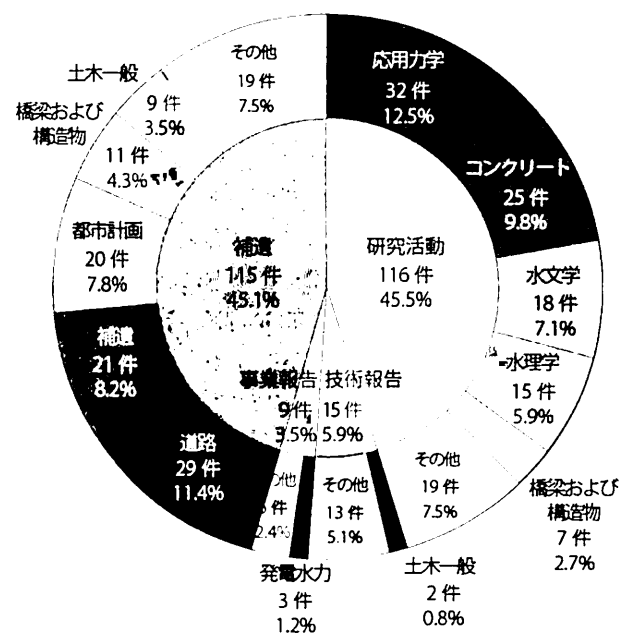


図-1 「記事の種類」と「分野」の割合 (筆者作成)

3. 五高工学部・熊本高工出身者の動向紹介

18名の執筆した雑誌記事が整理されたが、その中には雑誌記事から具体的な動向を辿ることができる者がいる。そのため、先行研究で明らかになった勤務先の変遷を具体的な情報で補いながら、その動向を紹介する。ここでは、1912（明治45）年に熊本高工を卒業した村井佐八（雑誌記事：『白石多士良氏の憶い出⁹⁾』）を取り上げる。

村井佐八は、熊本県出身である。1912（明治45）年に熊本高工卒業後、鉄道院大分建設事務所に就職する。1913（大正2）年2月より佐伯線第四区の現場詰所勤務となり、佐志生、大泊間の建設工事の一部を担当することになる。当時の事務所には、事務所長として那波光雄博士、主席技師に高石庸治、小林休三、原口祥二がおり、同期生には、一高、東大土木出身の白石多士良（のちの白石基礎工事株式会社社長、パシフィックコンサルタンツ社長）、釘宮磐（のちの東京大学第二工学部教授）、平山復二郎（のちのパシフィックコンサルタンツ社長、第44代土木学会会長）、熊本高工出身の川上伍七がいた。

1915（大正4）年か1916（大正5）年頃には、臼杵の現場で線路引延の工事や跨線橋工事などを担当する。その後、大分事務所へ戻り、日豊線の佐伯、延岡間の測量設計等に従事、1918（大正7）年には日豊線の第五第六工区の監督を経て、1920（大正9）年に鉄道院を退職する。

同年より三井水力電気建設事務所に移り、1923（大正12）年には、宇治川電気臨時建設部第三部第二課、1925（大正14）年には高野山電気鉄道株式会社を渡り歩いた。

1932（昭和7）年9月には以前の上司である高石庸治が鹿島組の重役をしていたこともあり、そのお世話になり鹿島組に入社する。鹿島組では満洲鹿島組に属し、朝鮮電業の義州ダム工事などに従事する。1946（昭和21）年1月には、鹿島組九州支店の開設に尽力することとなる。というのも、戦後、満洲鹿島組にいた村井佐八に九州支店の創設と引揚社員の受け入れが命じられたためである。村井佐八は、朝鮮、満洲、シンガポールからの引揚社員を呼び寄せて支店開設の準備にかかる。

これ以降の動向は、不明である。

4. おわりに

本研究では、高等な土木技術者教育をおこなっていた五高工学部・熊本高工出身の工学得業士について、その群像の一端を描くことを試みた。

戦前には、帝国大学出身の工学士や高等工業学校出身の土木技術者などがいた。研究や書籍で土木技術者の人

物像が取り扱われる背景には、評価された土木事業に携わっていたこと、著名な土木技術者であったこと、伝記を含め、その人物に関する資料が現存していることなどの理由が考えられる。その場合、帝国大学出身の工学士が取り扱われることは必然である。工学士以外が取り扱われる場合も少数ながらあるが、そもそもその人物に関する資料自体の数が少ない。例えば、今回調査した雑誌記事についてみても、五高工学部・熊本高工は611名のうち90名、458件の記事であったのに対し、先に示した『京都大学工学部土木工学教室六十年史』には、約3,000件の雑誌記事が掲載されている。つまり、工学得業士や高等工業学校出身者、それ以外の土木技術者が雑誌記事や書籍としてその動向を残していることは少ないことがわかる。

しかし、実際に現場の舵取りや、地方での土木事業に主に携わった土木技術者は高等工業学校出身者である。個別で評価することは難しいため、群として捉え評価することにより、戦前の土木技術者の全容を明らかにできる可能性がある。このような調査が各地、各学校でされることにより、現在は評価されることのない土木構造物の価値を判断する指標としても有用になると考えている。

参考文献

- 1) 山中孝文、田中尚人、星野裕司、本田泰寛：土木分野における工学得業士に関する研究—五高工学部・熊本高工の卒業生を対象として—、土木学会論文集 D2（土木史）、Vol.68, No.1, pp.82-85, 2012.8
- 2) 中島健吉：吾人生観——八十七年の旅路から、長崎書房、1977.2.15
- 3) 平野徹：創業者 安部源三郎小伝、株式会社安部工業所、1984.12
- 4) 小牧才二：ふれあい、株式会社教育出版センター、1983.11.15
- 5) 小牧才二：考える、南日コンクリート株式会社、1967.9
- 6) 立川義正：ある土木技術者の生涯、熊日情報文化センター、2009.8.10
- 7) 近代水道百人選考委員会：近代水道百人、1988
- 8) 藤井肇男：土木人物事典、アテネ書房、2004
- 9) 村井佐八：白石多士良氏の憶い出、白石基礎工事、pp.27-33, 1955

(2013.4.5 受付)

表-1 雑誌記事データベース（一部抜粋，筆者作成）

著者名（カッコは他校の卒業生）	勤務先、職階	記事タイトル	雑誌名	出版社	巻	号	ページ数	発行年月	記事の種類	分野
1907（明治40）年										
植村倉蔵	KOBE CITY WATER WORKS.	An Example of the Compound flow pipe increased Convey Water.	水道	水道社	6	10月 號	26-31	1931.10	研究活動	上下水道
植村倉蔵	-	神戸市水道上ヶ原線通過池集水渠	土木學會誌	土木學會	18	6	1-10、附	1932.6	研究活動	上下水道
植村倉蔵	-	姫路通過池に於ける通過速度の研究	土木學會誌	土木學會	18	6	13-18	1932.6	研究活動	上下水道
植村倉蔵	-	閉路流速に就て	工學研究	工學研究社	2月	111	1-5	1933.2	研究活動	上下水道
植村倉蔵	-	植村倉蔵氏の回顧	水道管破裂の復舊作業と所要時間に就て	東亞印刷株式會社	-	-	141-145	1934	補遺	人物像
植村倉蔵	-	水道管破裂の復舊作業と所要時間に就て	土木學會誌	土木學會	21	6	4-5	1935.6	研究活動	上下水道
植村倉蔵	-	鐵管の強さに就て	土木學會誌	土木學會	21	7	9-10	1935.7	研究活動	上下水道
植村倉蔵	元神戸市水道局技師	河川の口簾する灌漑用水量	水道協會雜誌	日本水道協會	157	-	11-17	1947.11	研究活動	河川
堅田務	工務局技師	實用的水流の圖表に就て（前編）	工業雜誌	工業雜誌社	32	428	89-93	1910.1	研究活動	水理学
堅田務	三菱礦業株式會社技師	水壓管としての水管利用に就て（前編）	發電水力研究會	發電水力研究會	51	-	2-4	1919.5	技術報告	水理学
堅田務	-	水壓管としての水管利用に就て（二）	發電水力研究會	發電水力研究會	52	-	1-3	1919.6	技術報告	水理学
堅田務	-	水壓管としての水管利用に就て（三）	發電水力研究會	發電水力研究會	53	-	1-4	1919.7	技術報告	水理学
1908（明治41）年										
松田健作	大阪市役所港灣部 技術課長	軟地盤に於ける橋脚特種工法 橋臺のない橋、大阪築港の日和橋	土木建築工事畫報	工事畫報社	5	7	14-17	1929.7	技術報告	橋梁および構造物
松田健作	大阪市港灣部技術課長	大阪港に於ける遠橋脚材の腐蝕並に鋼夾板の利用に就て	港灣	日本港灣協會	8	10	19-27	1930.10	技術報告	港灣
松田健作	-	地盤軟弱なる大阪港に於ける繫船岸壁及防波堤工事の特種工法に就て	土木學會誌	土木學會	19	5	1-14、附 圖8頁	1933.5	技術報告	港灣
松田健作	-	地盤軟弱なる大阪港に於ける繫船岸壁及防波堤工事の特種工法に就て	土木學會誌	土木學會	20	2	17	1934.2	技術報告	港灣
松田健作	-	満洲地に於ける粘土質路盤の防護に就て	土木學會誌	土木學會	20	11	1	1934.11	技術報告	鐵道
松田健作	-	方塊積構造物の安定度に就て	土木學會誌	土木學會	22	4	15	1936.4	補遺	港灣
1911（明治44）年										
山本格	九州建設株式會社取締役土木部長	バケツに於ける鋼線コンクリート施工に就いて	水力	シビル社	3	4	11-30	1940.7	技術報告	發電水力
山本格	大阪建設株式會社顧問	建設の機械化には均質を	建設の機械化	日本建設機械化協會	41	-	1	1953.7	補遺	施工
山本格	大成建設株式會社	「クラッシュングプロダクト」に就て	建設の機械化	日本建設機械化協會	45	-	2-7	1953.11	補遺	施工
山本格	大成建設株式會社顧問、本協会顧問	「我等は如何に進むべきか」	建設の機械化	日本建設機械化協會	47	-	12	1954.1	補遺	補遺
山本格	大成建設株式會社顧問	砕石と製砂	建設の機械化	日本建設機械化協會	57	-	35-41	1954.11	補遺	材料
山本格	大成建設株式會社顧問	「アサノマスコンセメント」の思い出	セメント工業	日本セメントセメント工業部	15	-	80-81	1955.3	補遺	コンクリート・鉄筋コンクリートおよびピーエスコンクリート
山本格	大成建設株式會社顧問	砂を訪ねて8000軒	建設の機械化	日本建設機械化協會	62	-	12-1535	1955.4	補遺	材料
山本格	-	建設機械の整備改良時代	建設の機械化	日本建設機械化協會	63	-	1	1955.5	補遺	施工
山本格	大成建設株式會社、顧問	建設の機械化について（II）	土木学会誌	土木学会	40	9	33-40	1955.9	補遺	施工
山本格	大成建設株式會社顧問、技術員設備製砂委員會委員長	最近の骨材生産方式と各種クラッシュヤの性能、破砕試験並に実績について	建設機械化研究論文集	日本建設機械化協會	昭和30年 度	-	125-152	1956	技術報告	材料
山本格	大成建設株式會社顧問	最近のダム用骨材製造特に製砂について	發電水力	發電水力研究會	28	-	30-39	1957.5	補遺	材料
山本格	大成建設株式會社顧問	ダム建設における仮設鋼の基本的考え方	建設の機械化	日本建設機械化協會	89	-	2-7	1957.7	補遺	施工
山本格	大成建設株式會社、理事長	人から機械へ	建設の機械化	日本建設機械化協會	113	-	11-13	1959.7	補遺	施工
山本格	-	液体酸素の注入機械の試作研究	建設技術並びに建設工業技術研究補助金による研究報告抄録	建設省	昭和38年 度	-	80-85	1964	研究活動	施工
山本格	株式會社日本建設技術社々々	西欧のダムを見て	大ダム	日本ダム會議	29	-	22-24	1964.11	補遺	ダム
山本格	(株) 日本建設技術社社長	Practice&Theory	建設の機械化	日本建設機械化協會	294	-	38-40	1974.8	補遺	補遺